

『蜻蛉日記』と『更級日記』の夢

——夢のあとの意識・行動——

本 橋 佳 奈

はじめに

『蜻蛉日記』は藤原道綱母が書き著した平安時代中期の日記文学である。成立は天延二（九七四）年以後であり、藤原兼家との結婚のときから天延二年の年末までの二十一年間のことを記している。自分の人生を日記形式で記した古典文学におけるの最初の作品である。

『更級日記』は菅原孝標女が書き著したこれまた平安時代中期の日記文学である。成立は康平三（一〇六〇）年であり、約四十年間の出来事を晩年に記した回想記である。ちなみに『紫式部日記』も、『更級日記』とほぼ同時期に成立した。

さて、自分の人生を日記形式で回想した日記文学である『蜻蛉日記』と『更級日記』の夢について論述してみたい。『紫式部日記』において、比喩（レトリック）としての「夢」という言葉が五回みられる。それに対して『蜻蛉日記』の中で「夢」という言葉の記述は二十九回、『更級日記』の中では三十三回ある。このことから、平安時代中期の日記文学の中で、『更級日記』と『蜻蛉日記』にはどちらも夢の記述が多いと言える。

それならば菅原孝標女と藤原道綱母は夢をどのように捉えていたのか。ここでは特に夢を見たあとにおける作者の意識・行動に注目して、『蜻蛉日記』と『更級日記』を比較したい。

1 夢の語り

まず『蜻蛉日記』と『更級日記』にみられる夢の全体像をとらえよう。

(一) 表現としての「夢」(比喩を含めて)

通し番号	作品名	夢を見た人	夢の記述
1	蜻蛉日記		などあるを聞くにも、夢のやうにぞおぼゆる。
2	蜻蛉日記		人やりならぬわざなれば、とひとぶらはぬ人ありとも、夢につらくなど思ふべきならねば、いと心やすくてあるを、
3	蜻蛉日記		とて、天下の猿楽事を言ひのしらるめれど、ゆめにものも言はず、涙のみ浮けれど、念じかへしてあるに、車寄せていと久しくなりぬ。
4	蜻蛉日記		大門引き出づれば、乗り加はりて、道すがら、うちも笑ひぬべきことどもを、ふさにあれど、夢路かものぞ言はれぬ。
5	蜻蛉日記		雨や風、なほやまず、火ともしたれど、吹き消ちて、いみじく暗ければ、夢の路のこちして、いとゆゆしく、いかなるにかとまで思ひまどふ。
6	蜻蛉日記		その後、夢の通ひ路絶えて、年暮ればてぬ。
7	蜻蛉日記	作者	いとまがまがしきほどなれば、かうのたまふも夢のこちなむする。

10	更級日記	作者	昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。
9	更級日記		やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や、見にけむかし。
8	更級日記	作者	九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふ心地、世の中にまたたくひあることもおぼえず。

(二) 実体をともなう夢の記述

11	蜻蛉日記	登子	「夢に、ものしく見えし」
12	蜻蛉日記	作者	さて、しばしば夢のさとしありければ、「ちがふるわざもがな」とて、七月、月のいとあかきに、かくのたまへり。
13	蜻蛉日記	登子	(歌) 見し夢をちがへわびぬる秋の空ぞ寝がたきものと思ひ知りぬる
14	蜻蛉日記	作者	(歌) さもこそはちがふる夢はかたからめあはでほど経る身さへ憂きかな
15	蜻蛉日記	登子	(歌) あふと見し夢になかなかくからされてなごり恋しくさめぬなりけり
16	蜻蛉日記	作者	(歌) こと絶ゆるうつやなにぞなかなかかに夢は通ひ路ありといふものを

26	蜻蛉日記	作者	など語るに、二月二十日のほごに、夢に見るやう、「本
25	蜻蛉日記	道綱	(歌) 夢ばかり見てしばかりにまごひつつあくるぞおそき天の戸ざしは
24	蜻蛉日記	兼家	「いとおぼえぬ夢見たり。ともかうも」
23	蜻蛉日記	作者	また、みづからの一昨日の夜見たる夢、右のかたの足のうらに、男、門といふ文字を、ふと書きつくれば、驚きて引き入ると見しを問へば、「このおなじことの見ゆるなり」といふ。
22	蜻蛉日記	侍女の夢 (夢解き)	「これは大臣公卿出できたまふべき夢なり。かく申せば、男君の大臣近くものしたまふを申すとぞ思すらむ。さにはあらず。きんだち御行先のことなり」
21	蜻蛉日記	法師	「いぬる五日の夜の夢に、御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふとなむ、見てはべる。これ夢解きに問はせたまへ」
20	蜻蛉日記	作者	これも悪し善しも知らねど、かく記しおくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも、用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり。
19	蜻蛉日記	作者	二十日ばかり行なひたる夢に、わが頭をとりおろして、額を分くと見る。
18	蜻蛉日記	作者	(長歌) あはざらば 夢にも君が 君を見で 長き夜すがら 鳴く虫の おなじ声にや たへざらむと
17	蜻蛉日記		(長歌) かつは夢かと いひながら 逢ふべき期なく なりぬとや 君も嘆きをこりつみて 塩焼くあまと なりぬらむ

34	33	32	31	30	29	28	27
更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記
作者	作者	僧	僧	同じ心に思ふべき人	作者の姉	作者	作者
<p>おはする丈六の仏は、その造りたりしなり。</p> <p>夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素姓まさりて人と生まれたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、その造りたりしなり。</p>	<p>聖などすら、前の世のこと夢に見るは、いと難かなるを、いとかう、あとはないやうに、はかばかしからぬ心地に、</p>	<p>この僧帰て、「夢」をだに見て、まかでなむが、本意なきこと。</p>	<p>「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せたまへ」などいひて、詣でさするなめり。</p>	<p>(歌) 明くる待つ鐘の声にも夢さめて秋のもも夜の心地せしかな</p>	<p>「夢」にこの猫のかたはらに來て、『おのれは侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中にありて、いみじうわびしきこと』</p>	<p>夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる、といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」といふと見て、人にも語らず、なにとも思はでやみぬる、いといふかひなし。</p>	<p>夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが來て、「法華經五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。となり。</p>

43	42	41	40	39	38	37	36	35
更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記	更級日記
作者	作者	作者	作者	作者	作者	作者	作者	作者
この夢ばかりぞ後の頼みとしける。	天喜三年十月十三日の夜の夢に、あたる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。	年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、	(歌) 夢さめて寝ざめの床の浮くばかり恋ひきとつげよ西へゆく月	宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたれば、夢なりけり。	三日さぶらひて、暁まかでむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。	その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。	うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。	暮れかかるほどに詣で着きて、齋屋に下りて御堂に上るに、人声もせず、山風おそろしうおぼえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、

44	蜻蛉日記	作者	御堂にてよろづ申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろみたるに、見ゆるやう、この寺の別当とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て来て、右のかたの膝にかくと見る。
45	蜻蛉日記	侍女	「この殿の御門を四足になすをこそ見しか」
46	更級日記	作者	「行くさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見ても、うちおどろきても、
47	更級日記	作者	かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかでぬ。
48	更級日記	作者	「亡くなりにはかば、こと人箱おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、清水にねむころに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。
49	更級日記	作者	初瀬川たちかへりつつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む (前回の初瀬詣で第三夜に見た)「すは、稻荷より賜はるしるしの杉よ」の夢をさす。
50	蜻蛉日記		夢あはする者来たるに、
51	更級日記	作者	夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。

分類した結果、『蜻蛉日記』の比喩としての「夢」の記述は七回あり、『更級日記』の比喩としての「夢」の記述は三回ある。このことから、比喩としての「夢」の記述は『蜻蛉日記』の方が多いと言える。また『蜻蛉日記』の実体をと

もなう「夢」の記述は十六回。『更級日記』の「夢」の記述は十四回ある。ただし『蜻蛉日記』は回想としての「夢」の記述はなく、『更級日記』には回想としての記述が四回ある。

ところで『蜻蛉日記』と『更級日記』の中には、「神仏との関連がある夢」を語るものが少なくない。二作品における作者の意識を比較してみると、孝標女は「神仏との関連がある夢」は仏が見させたものであるとは思わず、仏に対する信仰心もなく、若い頃は熱心に勤行を積むこともなかった。対して道綱母は「神仏との関連がある夢」は仏が見させたものであると認識し、熱心に勤行を積むなどして、自身の行動を決めるきっかけであった。

しかし、また、道綱母は自分が見た夢を夢解きに占わせ、息子の榮達を表した夢だと言われても、「をこなる」というように夢占いの結果を一蹴している。道綱母は夢を醒めた目で見ていたともいえよう。西郷信綱氏が、「夢にたいし独特の醒めた態度を持っている点で、蜻蛉日記は、夢の歴史を考えようとするものにとつて逸することのできぬ作品ではないかと思う。」^注というように、それは『蜻蛉日記』の一つの性格を基底するものともなっている。

2 夢のあと

そこで夢のあとの記述に目を向けよう。もとよりその特徴的なありようをセレクトしてみたい。まずは『蜻蛉日記』から。

II (登子が見た夢)

「夢に、ものしく見えし」などいひて、あなたにまかだたまへり。さて、しばしば夢のさとしありければ、「ちがふるわざもがな」とて、七月、月のいとあかきに、かくのたまへり。

「不吉な夢を見たので」などと言って、あの人の邸の方に行つた。さて、それから再三悪い夢のお告げがあったので、「厄払いがしたい」と言つて、七月、月がとても明るい夜に、こうおっしゃつた。

不吉な夢を見た登子は兼家の邸に行つた。その後も悪い夢のお告げがあつたので、「夢違えがしたい」と言つて、作者に和歌を贈答している。登子は夢のお告げを信じ、作者に悪い夢を見た不安を語るなど、夢を重要視し、別の夢を見

て前に見た凶夢を払おうとしている。

15 (登子が見た夢)

あふと見し夢になかなかくられされてなごり恋しくさめぬなりけり

「あはでほど経る」とか。私は夜な夜な夢でお逢いしています。その夢の名残りで醒めても悲しみにかきくれうつろな心地です。それでお伺いすることも叶わないのです。

凶夢を見た登子は夢で作者と会っているが、悲しい夢の名残で夢が醒めてもうつろな心地であるため、現実で作者に会いに行くことができないことを和歌にしている。

19 (作者の夢)

悪し善しもえ知らず。

凶夢か吉夢かもわからない。

勤行をした後に見た夢で、夢の吉凶はわからず、日記に書くにとどまっている。

20 (作者の夢)

これも悪し善しも知らねど、かく記しておくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも、用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり。

これも凶夢か吉夢かも知らないが、このように書きとめておくのは、こんな身の成りゆく果てを見聞く人が、夢をも仏をも、信ずるに足るのか、信ずるに足りないか、決めてほしいと思つてなのだ。

夢を日記に書きとめておくのは自分のような者の身の成りゆく果てを見聞きした者が、夢や仏を信じるべきか否かを決めて欲しいからであるというように読者に判断を委ねている。

21 (法師が見た夢)

いとうたておどろおどろしと思ふに、疑ひそひて、をこなるこちすれば、人にも解かせぬ時しもあれ、夢あは

する者来たるに、異人の上にて問はずれば、うべもなく、「いかなる人の見たるぞ」と驚きて、「みかどをわがま
まに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」とぞいふ。「さればよ。これがそらあはせにはあらず。」いひおこ
せたる僧の疑はしきなり。あなかま。いと似げなし」とてやみぬ。

まあいやだ、大袈裟なことと思うと、疑いも湧いて、馬鹿馬鹿しい気がするので、誰にも占わせなどしないでいた折も折
夢判断をする者が来たので、他人の話として聞くと、やはり、「どのよう人の見た夢か」と驚いて、「朝廷を意のままに
取りしきり、思いどおりの政治を行うことになりましようぞ」と言う。「やつぱりだ。この夢解きが、いい加減なのは
ない。法師が疑わしい。内緒だよ。とんでもない」とそのままにした。

自分のために法師に参籠して夢を見てもらった作者は法師から夢の内容を聞かされ、夢解きに占わせるように言われ
た。夢解きに法師が見た夢を占わせることは大袈裟ではかばかしいと思ひ、誰にも話さず、夢解きが来た時に、他人の
話として聞いている。夢解きは男性の榮達と解いているが、息子のいる作者にとつて都合のいい夢を夢解きに法師が占
わせたと作者は疑ひ、夢占いの結果を誰にも話さなかつた。夢の内容が神仏に関連したものではないこと、傍流の一
族であつた作者にとつて道綱の出世が信じ得るものでなかつたこともあり、作者は夢解きの結果を醒めた目で見てい
るといえよう。

22 (侍女が見た夢)

といへば、「これは大臣公卿出できたまふべき夢なり。かく申せば、男君の大臣近くものしたまふを申すとぞ思
すらむ。さにはあらず。きんたち御行先のことなり」とぞいふ。

と言うと、「これは大臣公卿になられる夢です。申し上げますと、ご夫君が近々大臣におなりになるのを申すとお思いで
しようが、そうではございません。御息のこの後のことです。」と言つた。

23 (作者が見た夢)

「この同じことの見ゆるなり」といふ。これもをこなるべきことなれば、ものぐるほしと思へど、さらぬ御族に
はあらねば、わがひとりもたる人、もしおぼえぬさいはひもやとぞ、心のうちに思ふ。

「先ほどの夢と同じが見える。」と言う。これも馬鹿げた夢に違いないので、とんでもないことは思つたけれど、大
臣公卿の出ない御族でないときは、私のたった一人の息子が、もしや思いがけぬ幸運でもつかむのではと、心のうちに
思つた。

夢解きは作者が見た夢を道綱の栄達と解いていて、作者はとんでもないと思ひながらも時が来れば息子が出世するの
ではないかと淡い期待を抱いてもいる。

24 (兼家が見た夢)

十一日になりて、「いとおぼえぬ夢見たり。ともかうも」など、例のまことにしもあるまじきことも多かれど、
〔本に〕

ものもいはれねば、「などか、ものもいはれぬ」とあり。「なにごとをかは」といらへたれば、『などか来ぬ、問
はぬ、憎し、あからし』とて、打ちも抓みもしたまへかし」といひつづけるれば、「きこゆべきかぎりのたま
ふめれば、なにかは」とてやみぬ。

十一日になりて、「全く思いがけない夢を見た。ともかくも、そちらへ伺つて話そう。」など、例のとても本当とは思えな
いようなことを書き連ねてはあるが、〔脱文を示す傍注〕

私が物も言えないでいると「なぜ、おし黙つておいでなのだ」と言われた。「何も申すことはございません」というと、
「どうして来ない、尋ねてくれない、憎い、あんまりだ」と言つて、打ちもつまみもなさつたらよい」とまくし立てら
れるので、「申し上げたいことは全部おっしゃつて下さつたので、これ以上、何も申し上げることはございません。」と
言つてそれっきりになつてしまつた。

兼家が「思いがけない夢」を見ているが、本文には夢の内容は書かれていない。作者は夢の話を書いて押し黙り兼家
がまくしたてるが作者は何も言わず、兼家はそれきり作者の邸に訪れなかつた。

25 (道綱の見た夢)

夢ばかり見てしばかりにまどひつつあくるぞおそき天の戸ざしは

夢ばかり見ていて途方に暮れている。天の岩戸を開きたような貴女の物忌の明けるのが待ち遠しい。

大和の娘に手紙を送つても白紙の返事しか来ない道綱は大和の娘と会う夢ばかり見ていたのかもしれない。夢ばかり見ていた道綱は、物忌みが明け大和の娘からたしかな手紙が欲しいと願っていることを和歌に詠んでいる。道綱は夢が重みがあるものではなく、儂いものであつたと考えていたといえよう。

次に『更級日記』から。

27 (作者の見た夢)

といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。物語のことをのみにしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじう長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

と言つた、と見たけれども、人にも話さず、そんなものを習おうなどとは思ひもしなかつた。ただ物語のことばかりを思いつめて、私は今のところ器量も良くないことだ。けれども年ごろになつたら、顔だちもこのうえなく美しく、髪もずいぶんと長くなるに相違あるまい。そして、光源氏の寵愛を受けた夕顔、薫の大將の想い人浮舟の女君のようになるだろう、と思つていた私の心は、いま考えてみると、なんともまず、たわいのない、あきれはてたものだった。

作者が若いときは不信心で法華経を習えという内容の夢を見た後でも、誰にも言わず習いもせず、物語のことばかり考え器量もよくなかつたが、年頃になれば懂れの浮舟のように美しくなるだろうと思つていた。しかしながら晩年に『更級日記』を書いた作者は若い頃の夢見がちな考えをあきれたものだと振り返っている。晩年になつてから仏を信仰した作者の考えが表れている。

28 (作者が見た夢)

といふと見て、人にも語らず、なにも思はでやみぬる、いといふかひなし。

と言う。そんな夢を見ながら、人にも話さず、何とも気にかげずにすましてしまつた怠慢は、まことにもつてふがない。若い頃に作者は夢で天照大御神を信仰しなさいというお告げがあつたが、誰にも言わず、気にかげなかつた。晩年の

作者は若い頃に仏を信仰しなかつたことを大後悔しているのである。

29 (作者の姉が見た夢)

と語りたまふを聞くに、いみじくあはれなり。その後はこの猫を北表にも出ださず思ひかしづく。

とお話しになる。私は姉の話を知ると、ひどく胸をうたれた。それからというもの、私たちはこの猫を北表にも出さず、たいせつにお世話した。

姉が病気になる、家が慌ただしくなり、猫を北表の部屋に置いておくと鳴き騒ぐ。猫が侍従の大納言様の生まれ変わりであるということを知り、家猫を連れてくるように作者に言い、夢の話をした。それから作者と姉は猫を大切に育てた。作者は姫君が亡くなったばかりであったことと猫の世話をおろそかにしていたことのうしろめたさがあったため、夢を信じ、猫を大切に育てたのだろう。後にこの猫が火事で死んでしまうことが『更級日記』には書かれている。

31 (僧が見た夢)

と語るなり。いかに見えけるぞとだに耳もとどめず。

と母に語ったそう。私は、僧の夢に自分の将来がどのように占われたものか、それさえ気に留めて聞こうとしなかつた。

作者の母は代参の僧を初瀬に参詣させた。僧が見た作者の将来に関する夢は明るい未来と暗い未来に二分していた。僧は夢の内容を母に語ったが、作者は僧の夢に自分の将来がどのように占われたかさ聞こうとしなかつた。この夢は神仏に関連したものではないため、晩年の作者がそれまで不信心であつたことを後悔するような記述はない。

34 (作者が見た夢)

と見てのち、清水にねむごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、詣でつかうまつることもなくてやみにき。

こんな夢を見てからのち、清水に参詣し、ねんごろに供養でもしたならば、前世にそのお寺で仏様にお祈り申したとかいうご利益によって、しぜん、幸運もひらけたかもしれない。ところが、まことにふがいなく、お参りして勤行するでも

なく、そのままになってしまった。

作者は神仏に關連する夢を見てから參詣もせず、勤行もしなかつた。この若い頃に勤行を怠つた後悔が晩年に寂しい暮らしをする作者が勤行に励み、『更級日記』に神仏に關連する夢を見たことを書く動機になつたのではないか。

36 (作者が見た夢)

うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。

はつと目がさめ、夢だつたのだなと思うにつけ、きつと良いことの前ふれたらうと信じて、一晚中、勤行に励んだ。

この夢の記述は「物詣の記」にある。後世の往生を念じるために、強い意思をもつて石山に參詣している。麝香を頂くとこの夢も吉夢と受け取り、熱心に勤行に励むところからも作者がいかにこの時の參詣に後の世の行く末を懸けているかがわかる。

37 (作者が見た夢)

とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓えなどして上る。

とおつしゃると見て、目がさめた。うれしく頼もしくて、いっそう熱心にお祈り申して、明くれば初瀬川などを渡り、その晩、長谷寺に行き着いた。さてお祓いなどをして御堂に參上した。

作者は夢の中で美しい女性に「あなたは宮中へ上ることになっています。博士の命婦(阿部長子)によく相談なさるがよい」と言われた。うれしく励みになり、以前よりも熱心に勤行をして長谷寺にも行つてゐる。このことは以前宮中に仕えていた作者がまた華やかな宮中へ上ることができるといふ現実ではありえないことだが、とても嬉しいことであつて励みになることを夢で言われたため、作者がますます勤行を熱心に行う動機となつてゐる。

39 (作者が見た夢)

月のいみじう明きに、かやうなりし夜、宮に参りてあひては、つゆまどろまずながめ明かいしものを、恋しく思ひつつ寝入りにけり。宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたれば、夢なりけり。

月も山の端近うなりにけり。さめざらましをと、いとどながめられて、

夢さめて寝さめの床の浮くばかり恋ひきとつげよ西へゆく月

月のたいそう明るいころ、こんなすばらしい夜には、御所に参上し顔を合せては、まんじりともせず月を眺め明かしたものだがと、懐かしく思いながら、つい寝入ってしまった。すると、御所で落ち合つて、まさしく昔のように、その人と過ごしているを見て、ふと目がさめると夢だった。月ももう西の山の端近く傾いていた。夢と知っていたら、さめなければよかつたのにと、ひとしお物思いを催して、こう詠んだ。

西へ行く月よ、あのお方に告げてくれ。あなたに逢つた夢からさめて、寝さめの床も浮くほどに、私はいま泣きぬれていると

「あの人」とは宮中に仕えていたところに恋に落ちた源資通のことであろう。晩年の作者にとって宮中での生活は懐かしく忘れがたいものであつた。戻ることのできない頃の出来事に思いをはせていた作者は物思いにふけて一首の和歌を詠んでいる。この歌も『古今和歌集』で小野小町が詠んだ歌を引き歌にしたと考えられる。

作者が詠んだ和歌だけではなく、地の文にも「恋しく思ひつつ寝入り」、「さめざらましを」と言つた前に挙げた和歌を参考にしたと考えられる文がある。悲しみの深さを「寝さめの床も浮くほどに、私はいま泣きぬれている」と表現しているところに作者の和歌の独自性がある。

41 (作者が見た夢)

初瀬にて前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かけにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふ方なりてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどしてただよふ。

最初の初瀬参詣の折、「稲荷からくださつたしるしの杉ぞ」と言つて、一枝の杉を投げ出された夢を見たが、あの時、退

出してすぐ、稲荷に参詣しておいたら、こんな不幸にあうこともなかっただろう。長年、「天照御神をお祈り申しあげよ」と見てきた夢は、高貴な方の御乳母となつて宮中に暮らし、帝や後の御庇護を受ける身となるのだとばかり、夢解きも合せてきたけれども、そんなことは一つとして当たらなかった。ただ、悲しそうだと思つた鏡の影だけが、的中したのが、悲しくもつらいことだ。私はこんなふうにならぬかと思つた。私には、思ふことの何一つかなうことなく、一生を終えてしまふ人間なので、今更、善報を願う功德なども積まないでうかうかと暮らしている。

初瀬参詣の折に夢を見てからすぐに稲荷に参詣しなかつたせいで、晩年の作者が住む邸に誰も訪れず一人寂しく暮らすという不幸も訪れなかつただろうという後悔が語られている。夢解きの作者にとつて都合の良かった夢占いも一つとして当たらなかつた。「天照御神をお祈り申しあげよ」という神仏に關連した夢でありながら、若い頃の作者は不信心であつたため信じていなかった。宮中での華々しい生活を送ることができるといふ夢解きの夢占いが当たらなかつたことを残念に思っている。ただ僧が見た作者の暗い将来を暗示する夢だけが当たつたと解釈している。作者は思ふことの何一つ叶わなかつた人生だつたと自らの人生を評しているが、物語を好みたくさんの物語を読みたいと願つて上京し『源氏物語』などの多くの文学作品を読むことができたということもあつた。作者の叶わなかつた願いとは、『源氏物語』の浮舟のような人生を送ることだつたのかもしれない。晩年の作者が「功德など積んでいない」と言っているが、若い頃と違つて「物語の記」のあたりから作者は勤行に励んでいる。作者は今までの人生を振り返つてあまりにも仏を信仰していなかつた時期が長すぎたのだと考えたのであろう。

43 (作者が見た夢)

うちおどきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

はつと目をさましたところ、十四日だつた。この夢ばかりを、後世を願う頼みとしていた。

現世でも何一つ思ふことの叶わない人生であつて、後の世の幸せも思ふようにはならないだろうと気がかりだつた頃、作者は夢で庭に輝きを放つ阿弥陀仏が来て、「のちにまた迎えに来る。」と言つたことが自分の耳にだけ聞こえたことを見た。この夢を作者は年老いた自分の心の拠りどころとして置いている。それほどまでに仏が夢の中で希望をもたらしてくれたこと

は有難いことであつて、この時の作者にとつては他の何にも代えがたい一つ一つの希望であつたと言えよう。

44 (作者が見た夢)

ふとおどろかされて、仏の見せたまふにこそはあらめと思ふに、ましてものぞあはれに悲しくおぼゆる。

ふと目をさまさせられて、仏が見させたものと思つと、いよいよ深く心を打たれ悲しみもこみ上げてくるのだつた。

作者が御堂でお祈り申して泣き明かしていたところ、法師が膝に水を注ぎかけるといふ夢を見た。ふと目が覚めて、この夢は仏が見させたものだと思つて、悲しみがこみ上げている。作者は悲しみに沈み、仏にすがつて熱心にお祈りをするので、自らの俗世での抱えきれない悲しみを慰め仏の恩恵を賜りたいと考えている。

47 (作者が見た夢)

うちおどろきても、かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかでぬ。

はつと目がさめてからも、これこれと夢の次第を母に話すでもなく、格別、気にも留めないで、お寺から下がつてしまつた。

今まで物詣をしなかつたことを母が昔気質だつたことと、自分の性分のせいであると後悔しながら、お彼岸の頃にうとうとと眠りこんでいると、作者の後悔を揶揄するかのようにならぬ。僧は作者が将来の悲しい事にも気付かずにいることを責める。夢を見てからも誰にも話さず気にも留めずお寺から下がるという行動からもわかるように、作者はこのころはまだ若く、仏に対して不信心であることへの後悔など少しも感じていない。

49 (作者が見た夢)

初瀬川わたるに、

初瀬川たちかへりつつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む

と思ふもいと頼もし。

初瀬川を渡る時、

初瀬の川波が立ち返るように、私もこうして再度、参詣に訪れたのだから、いつぞやの夢に見た稲荷の杉の御験を、

今度こそはきつと現実にくらむことにもなるうか

と思うにつけてもたいそう頼もしい。

「いつぞやの夢」とは前回の初瀬詣での夜に見た夢のことを指している。作者が再び参詣したことでいつかの夢に見たように仏の恩恵を賜うことができるのではないかと期待し、希望に満ち溢れた心地である。仏が見させた夢を信じ、見た夢の力を信じることでより頼もしいと感じている。

おわりに

以上『蜻蛉日記』と『更級日記』から夢のあとにかかわる必要な記述をとりあげてみた。また、必要に応じてコメントを記しておいた。

すでに触れておいたように、『更級日記』の作者孝標女は、夢に対して無関心というべき若年の時代を経て、後年に至って夢を重くとらえるようになる。孝標女は幼い頃から物語にあこがれ、現実にはあり得ない——たとえば夕顔や浮舟のような人生を送りたいと夢想するような多感なかつ感傷的な女性であったとみられるが、こと夢そのものに関しては、ほとんど無関心であったといえよう。

『更級日記』の27番と28番と32番と34番の夢を見た後の行動に共通していることは、作者は神仏に関連した夢を見たり、夢のお告げがあつたりしても話を聞こうとせず、気にも留めなかつたことである(28「何とも思はず」32「耳にもとめず」)。このように若い頃に見た夢を信じずに勤行もしなかつた後悔を『更級日記』の27番と28番と41番の夢を見たと後の晩年の作者が語っている。不信心であったことを後悔し、夢に従わなかつたことをあきれたものだと振り返っていて、晩年になってから仏を信仰した作者の心情が表れている。「物語の記」あたりから作者は熱心に勤行に励んでいる。若い頃に見た夢のお告げを晩年になってから思い起こして、今まで信じなかつた夢のお告げに従って行動しようとしたからであろう。

そして西郷氏は「この日記は、かつて見たことのある夢を索引にして、来しかたを主観的に手繰りよせるといふ傾向

を多分にもっているからだ。」^註という。おそらくそのとおりであろう。

一方『蜻蛉日記』の作者道綱母は終世夢に対して深い関心を持ちつつづけていたとみられよう。そこに『更級日記』との違いが認められよう。

しかし、夢に関心を持ちつつづけていたとはいえず、道綱母は西郷氏が言うように常に「醒めた態度」を持ちあわせている。19や20にみるように、その夢は凶夢か吉夢かわからないといい、また21においては「疑ひそひて、をこなること」がするといいい、23においても「これもをこなるべきこと」だという。

ここに道綱母の夢に対する独自の目が認められるとともに、『蜻蛉日記』の基底にありつつづける目に重なっていよう。それは兼家との交渉の途絶えがちな仲を、苦渋とともに冷徹に見つつづけた目でもあり、それ故にまた、自らの苦悩を深めさせた目ではあるまいか。もとよりそこに屹立した女性として、また、愛児道綱を思う母として生きようとするありようがいつそう苦悩を深めさせているといえよう。

その意味で、兼家が作者の邸に訪れなくなった話が、24のように夢にかかわることは象徴的なことのように思われるのである。

* 本稿における『蜻蛉日記』と『更級日記』本文の引用は、それぞれ犬養廉校注・訳『新潮日本古典集成 蜻蛉日記』（新潮社刊）、藤岡忠美・犬養廉・中野幸一・石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讚岐典侍日記』（小学館刊）を用いた。

注 西郷信綱『古代人と夢』（平凡社、一九九三年）